

岡田和秀先生と私

加藤茂夫
経営学部教授

平成20年12月16日に岡田和秀先生の最終講義が生田校舎430教室で盛大に挙行された。司会是高沢十四久先生である。高沢先生と岡田先生のお付き合いは早稲田大学大学院から愛知学院大学を経て専修大学経営学部に奉職され、同じ経歴をたどり45年になるという。最終講義は学生や教職員、岡田ゼミ出身者の多くが参加してくれた。岡田先生の人柄や人間性が十二分に発揮された実に格調高い講義であった。岡田ゼミ出身者が最後に花束を贈呈した姿が実にさわやかであり心に焼きついた。

さて、岡田先生と私は専修大学経営学部の同僚として25年間のお付き合いであった。10歳若い私の縦横無尽の活動にも寛大な精神で受け止めてくれた。学問はともかく人生の生き方に共感し、共振できたことが今日までお付き合いできたことに繋がっているものと思う。岡田先生にとっては迷惑至極を承知で省みるならば兄貴のような存在であった。小生の経営学部長時代には岡田先生に多くの難題の解決をお願いしたり、専修大学の方向性を決定する委員会の責任者をお願いしたり、数々のご迷惑をお掛けした。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

岡田先生とは良く飲食を共にした。良い意味で饒舌であり、その背景には人生経験の豊かさがあり、飲めば飲むほど独壇場になる。談論風発をこよなく愛した。そのことを良しとしない人もいるが私にとっては大いに結構なことだと常々考えていた。酒席後の音曲については私のほうが一枚も2枚も上であったが、先生はもともと楽曲に関しては評論家の才能をお持ちだったのか、はたまたその才能が開花したのか実践を重ねるたびに山に登るが如く小生に接近してきた。

さて身近にいた人が少し遠くに行ってしまうことの寂寥感をひしひしと感じるのは私だけではないだろう。宋の詩人朱熹の有名な詩に「偶成」がある。

少年易老学難成，一寸光陰不可輕，未覺池塘春草夢，階前梧葉已秋聲。

少年老い易く学なりがたし……，岡田先生の良いところは少年のような心を持っている点である。その心をいつまでも大切にすることがこれからの充実した人生に結びつくことになるだろうと期待して止まない。有難うございました。